

適期に適量の追肥と赤かび病防除を確実に実施！

令和8年3月 31日
新潟農業普及指導センター

当面の栽培管理

(1) 止葉抽出期追肥（表1参照）

- ・大麦は窒素成分で10a当たり1～2kg、小麦(ゆきちから等)は、窒素成分で10a当たり2kgとし、生育に基づき加減する。

表1 止葉抽出期の生育と窒素施用量のめやす

㎡当 茎数	葉色 (SPAD値)	窒素施用量 (kg/10a)	留意点
500本 未満	45未満	2	<ul style="list-style-type: none"> ・止葉抽出期は全茎の40～50%で止葉が抽出した時期 ・砂質土壌では左記+1kgとする ・過繁茂、葉色が濃いほ場では施用を控える
	45以上	1～2	
500本 以上	45未満	1～2	
	45以上	1未満	

(2) 穂揃期追肥（小麦）

- ・ゆきちから、夏黄金は子実タンパク質含有率向上のため、穂揃期（出穂期の3日後）に必ず追肥する。
- ・標準施用量は窒素成分で4～6kg/10a(砂質土壌では6～8kg/10a)。

(3) 赤かび病防除（表2参照）

- ・開花期に降雨が多い場合は、感染リスクが高まるので、小麦は必ず3回防除を行う。

表2 赤かび病の防除のめやす…出穂期を基準にして時期を決める

区分	時期のめやす	参考
大麦	1回目：開花期（出穂期の4～7日後頃）	<ul style="list-style-type: none"> ・出穂期とは、全茎の40～50%が出穂した日 ・出穂とは、穂の先端(芒を含まない)が葉鞘から現れた状態
	2回目：1回目の7～10日後頃	
小麦	1回目：開花期（出穂期の7～10日後頃）	
	2回目：1回目の7～10日後頃	
	(3回目：2回目の7～10日後頃)	

※農薬の使用にあたっては、登録内容を確認して適正に使用する。

※農薬ラベルに記載された、「適用作物」「使用量・濃度」「使用時期」「農薬成分の総使用回数」「使用方法」を確認する。

○ほ場巡回による発生確認

- ・出穂後はほ場を随時見回り、変色穂の抜き取りを実施する。
- ・夏黄金は熟期が進むと変色が見分けにくくなるので注意する。
- ・変色穂が比較的多いほ場(赤かび病の発生、発生が疑われる場合)は、他ほ場と刈り分ける。

赤かび病（大麦：ミノリムギ）



夏黄金の成熟期頃



赤かび病の症状（小麦：ゆきちから）



農産物検査法の検査規格では、赤かび粒の混入限度が0.0%と定められています。出穂期、開花期を確認し、適期防除により赤かび病の発生を抑えましょう！